

**報告 国立大学における教養科目としての体育の
現状 : 履修方法および担当教員に着目して**

著者	図子 美和, 中川 昭
著者別名	Zushi Miwa , Nakagawa Akira
雑誌名	大学体育研究
号	37
ページ	27-35
発行年	2015-03
その他のタイトル	Reports Current status of physical education as liberal arts at national universities in Japan : Focusing on curriculum and teachers in charge
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124249

国立大学における教養科目としての体育の現状 —履修方法および担当教員に着目して—

関子美和¹⁾, 中川 昭¹⁾

Current status of physical education as liberal arts at national universities in Japan — Focusing on curriculum and teachers in charge —

Miwa ZUSHI¹, Akira NAKAGAWA¹

1. はじめに

平成 28 年度から筑波大学と鹿屋体育大学は相互に連携して、大学体育スポーツ高度化共同専攻の開設を予定している（学位プログラムとしては平成 27 年度から開始する）。この新しい専攻は、従来型の学術研究による学位取得を目指すものではなく、大学という高等教育課程における体育の存在意義や価値を創造し、高度な体育授業に関する実践力と大学体育・大学スポーツの発展に寄与する実践的研究力の養成を主眼とした国内初の博士後期課程である。

日本国内の大学で働く体育系の教員は、大きく 2 つに分類することができる。その一つは、体育学部やスポーツ健康科学部などの専門教育課程に所属し、体育・スポーツを専門にした教育および研究を実施する教員である。他の一つは、一般的な学部や教養教育センター等の教養教育課程に所属し、教養としての体育授業を実施する教員である。体育およびスポーツを専門とする大学・学部にも所属する学生数に比較して、一般的な大学の学部にも所属する学生数は極めて

多く、また、そのために後者に位置付く体育教員の割合も多いと思われる。したがって、この新しい専攻で学位を取得する学生の多くは、後者の教養体育の教員としての職を得ることになる。また、このように多数在職する教養体育の現職教員が、再教育を受けながら学位取得を目指すために、この新しい専攻を選択する可能性も多くあると推察できる。

これらのことから、日本国内の大学における教養体育の授業と体育教員に関する様々な実情を明確に把握しておくことは、新しい専攻を開設するに当たって必要不可欠であると考えられる。しかし、これまでも特定の大学における教養体育に関する研究（宮丸, 2001; 松田ほか, 2010; 高木ほか, 2014）や全国規模で国立大学の状況を調査した鍋倉ほか（2012）の報告は存在するが、卒業要件や担当する教員情報などの詳細なカリキュラムを調査した研究は存在しない。そこで本研究では、日本国内の国立大学に注目し、教養教育課程にある体育授業の履修方法および卒業要件と、その担当教員の配置に関する実態について明らかにした。

1) 筑波大学体育系

2. 調査方法

文部科学省のホームページに記載されている国立大学 86 校の中から、学士課程を有する大学 82 校を選択し、教養教育課程における体育授業を実践している 81 大学を調査対象とした。調査期間は、平成 25 年 8 月から平成 25 年 12 月までとした。基本的には各大学のホームページを検索し、大学の学則およびカリキュラムの内容を調査することによって、基礎データを収集した。しかし、ホームページ上に情報が記述されていない場合も多数存在した。そのような場合には、電話による質問形式の問い合わせを行うとともに、各大学の教務課などの担当部署へのメールによる質問調査も実施し、各大学に対する基礎データの内容を統一した。

調査内容は下記に示すように、体育授業の履修方法と卒業要件に関する内容、および教養教育課程の体育を担当する教員に関する内容であった。

なお、これ以降は教養教育課程における体育を「体育」とし、その授業を「体育授業」と表記する。

(1) 「体育」の履修方法と卒業要件

- 1) 「体育」を開講している学部数
- 2) 「体育」を開講している学科数
- 3) 「体育」を必修としている学科数
- 4) 全学科数に対して「体育」を必修として

いる学科の割合

- 5) 「体育」を受講している学生数
 - 6) 「体育」を必修として受講している学生数
 - 7) 「体育」を受講している学生数に対して必修として受講している学生数の割合
 - 8) 各学科における必修としている単位数(卒業要件)
- (2) 「体育授業」を担当する教員
- 1) 教授、准教授、講師、助教、その他、非常勤講師の各教員数
 - 2) 担当教員の総数
 - 3) 全担当教員数に対する専任教員(非常勤講師以外)の割合

3. 結果および考察

調査対象の国立大学 81 校に所属する学生は 444,777 名であった。また、各大学の規模がわかるように、図 1 に学生数ごとの大学の数およびその割合を示した。この 81 校のうち、「体育授業」が開設されている学部は 355 学部、学科は 1128 学科存在していることが認められた。一方、大学の種別ごとに見ると、総合系の大学が 50 校、教育系の大学が 11 校、医学や工業などの単科系の大学が 19 校存在した。

なお、「体育」の開設がなく、「体育」の専任教員および非常勤講師が一人もいない大学が 1 校存在したが、本研究では、「体育」を履修し

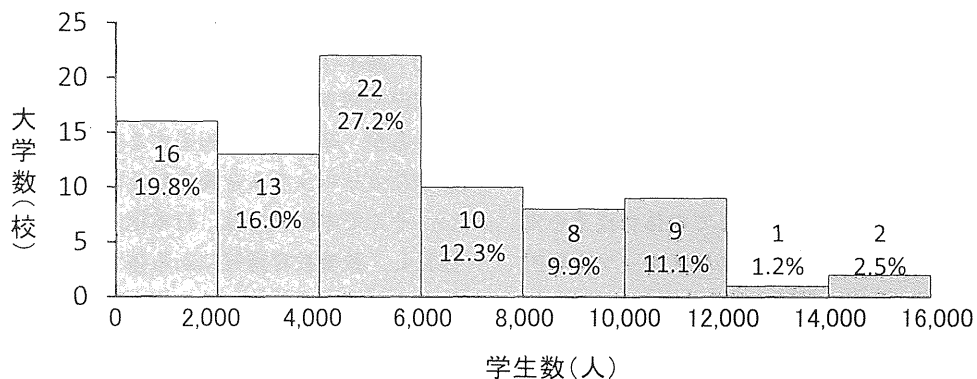


図 1 学生数からみた国立大学の規模

なくても卒業できる大学（「体育」を卒業要件としない・必修としない）に分類した。

(1) 「体育」の履修方法と卒業要件

表1は本研究において収集した基礎的なデータの中から、国立大学における「体育」の履修方法と卒業要件についてまとめたものである。

1) 履修方法

「体育」の履修方法については、各大学別、学部や学科ごとに大きな相違があり、そこに在籍する学生数も大きく異なっていた。「体育」を必修にするか、あるいは選択にするかは、国立大学間で統一的な施策はなく、それぞれの大

学や学部・学科の意向を反映して決定されているために、大きな差があることが理解できる。

このように履修方法が学部で統一されている大学もあれば、学科ごとに異なっている大学もあるため、本研究では学科を一つの単位として「体育」の履修方法に関する調査結果を提示した。

図2は、学科を単位として履修方法をまとめたものである。全ての学科において「体育」を必修（卒業要件）としていた大学は48校存在しており、その学科数は546学科となり、全学科数の48.4%と約半分の割合を示すことが認められた。一方、全ての学科において「体育」を必修としない（卒業要件としない：以降選択

表1 各大学の学科あたりでみた「体育」の必修率と単位数

NO	学部数	学科数	「体育」が必修の学科数	「体育」必修率(学科数)	「体育」の卒業要件の単位数別の学科数					学生数	
					0単位	1単位	2単位	3単位	4単位		5単位
1	1	2	2	100%				2			3,985
2	3	14	6	42.9%	8	5	1				4,544
3	1	2	0	0%	2						957
4	5	19	19	100%			19				7,138
5	4	17	17	100%		5	12				4,958
6	4	14	14	100%			14				4,225
7	7	25	25	100%		25					8,394
8	4	13	4	30.8%	9		4				5,040
9	1	3	3	100%			3				4,230
10	11	24	24	100%			24				15,562
11	12	25	4	16.0%	21				4		10,185
12	1	4	4	100%			4				2,322
13	3	12	12	100%			12				2,062
14	1	2	2	100%		1	1				1,170
15	6	14	4	28.6%	10		4				5,679
16	9	26	26	100%			13	4	9		8,993
17	3	15	0	0%	15						7,989
18	1	3	3	100%			3				1,876
19	5	13	13	100%		1	12				5,744
20	2	11	11	100%			11				4,283
21	12	29	29	100%			29				11,791
22	1	1	1	100%			1				1,348
23	1	4	0	0%	4						2,905
24	10	21	0	0%	21						13,551
25	7	24	0	0%	24						8,075
26	4	10	10	100%				10			5,175
27	6	14	0	0%	14						2,359
28	11	28	19	67.9%	6	20	1		1		11,861
29	5	22	5	22.7%	16		6				7,310
30	5	21	19	90.5%	2		2		17		6,184
31	1	2	1	50.0%	1	1					918
32	2	9	9	100.0%			9				4,230
33	6	24	4	16.7%	20		4				8,816
34	5	21	0	0%	21						5,399
35	1	2	2	100%					2		685
36	8	29	29	100%			24		5		9,264
37	9	37	37	100%		37					10,796
38	4	9	9	100%			3			6	356
39	7	24	24	100%			17	7			9,797
40	1	5	5	100%			1	4			3,858
41	2	4	4	100%			4				1,454
42	2	2	2	100%			2				3,775
43	2	7	7	100%				7			1,454
44	2	10	10	100%				10			4,955
45	2	14	0	0%	14						2,008
46	3	24	24	100%					24		4,803
47	1	6	6	100%				6			14,013
48	2	14	14	100%			7	7			3,893
49	10	24	15	62.5%	9	5	1	9			11,003
50	6	23	13	56.5%	10		13				5,885
51	4	18	14	77.8%	4	14					5,279
52	8	27	27	100%		5	22				8,236
53	1	5	5	100%						5	1,138
54	1	7	7	100%			7				1,198
55	8	10	10	100%				10			7,618
56	2	12	12	100%				12			4,228
57	9	17	16	94.1%	1		5		11		10,198
58	1	2	2	100%			2				1,126
59	3	12	12	100%				12			2,109
60	1	3	3	100%						3	453
61	10	28	25	89.3%	23	1			4		10,342
62	1	2	1	50.0%	1	1					954
63	4	6	6	100%				6			4,448
64	1	2	2	100%				2			700
65	5	19	1	5.3%	18	1					6,117
66	11	25	21	84.0%	4		21				10,941
67	3	13	13	100%				13			4,147
68	1	6	6	100%						6	2,835
69	2	5	5	100%				5			4,220
70	1	4	4	100%	0		4				5,131
71	12	32	0	0%	32						11,632
72	5	17	17	100%		1	12		4		6,171
73	1	3	3	100%					3		1,525
74	4	17	16	94.1%	1	7	9				4,723
75	1	4	0	0%	4						2,801
76	6	19	3	15.8%	16	3					7,695
77	8	30	29	96.7%	1	24	5				8,761
78	4	15	15	100%				15			3,920
79	4	13	1	7.7%	12		1				7,471
80	7	21	19	90.5%	2		15		4		7,298
81	4	12	10	83.3%	2		8		2		4,105
計	355	1128	796	70.6%	348	173	464	64	73	6	444,777

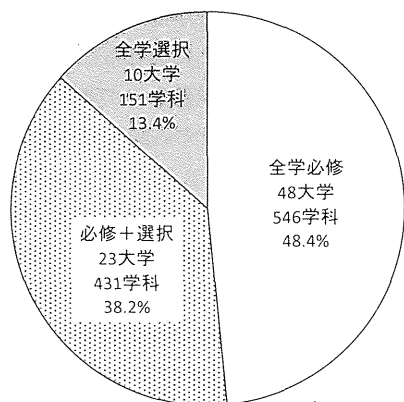


図2 「体育」の履修方法(学科単位でみた割合)

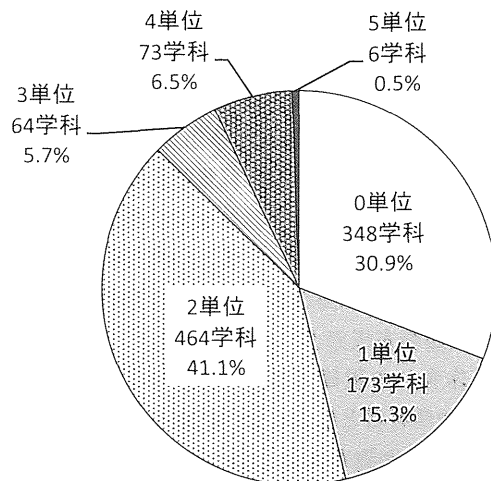


図3 「体育」の各必修単位数の割合

とする) 大学は10校存在しており、その学科数は151学科となり、全学科数の13.4%であることが認められた。なお、この2つのタイプに当てはまらない大学、すなわち学科によって必修あるいは選択と履修方法が異なる学科が混在している大学は23校存在しており、その学科数は431学科となり、全学科数の38.2%であることが認められた。なお、大学単位で見ると、全学必修の大学59.3%、全学選択の大学12.3%、必修+選択の大学28.4%となる。

2012年の鍋倉ほか(2012)の報告では86%の大学が「体育」を必修としていた。これは、国立大学だけではなく、国立と公立および私立を合わせた88大学のデータによるものであった。母集団の規模や性質、調査方法などが異なるために、正確な比較はできないが、その後数年が経過している本研究結果と比較すると、「体育」を必修とする大学は、86%から60%へとかなり減少していることが認められた。

2) 必修の単位数

図3は、全ての大学の1127学科において、各学科の卒業要件としている「体育」の必修の単位数とそれぞれの単位数を有する学科数を調査し、その割合についてまとめたものである。

「体育」を必修(卒業要件)とした学科は、前述のとおり全学科数の48.4%存在していた(図2)。しかし、その内容となる単位数に注目すると、2単位必修が最も多く464学科となり、全体の41.1%となることが認められた。次に多く見られた「体育」を選択とする学科、つまり「体育」を卒業要件としない0単位の学科は348学科となり、全体の30.9%となった。さらに、1単位必修は173学科となり、全体の15.3%となった。1単位あるいは2単位という履修方法を授業期間に置き換えると、半期から1年だけの期間の履修が56.4%を占めていることが認められた。

3) 学生数と必修率

大学の規模の違いによって「体育」の必修率が変わるかどうかを検討するために、図4に学生数と「体育」必修率の関係を示した。学生数と「体育」必修率の間には有意な相関関係は認められなかった($r = -0.142, n.s$)。一般的には、小さな規模の大学ほど「体育」の必修率が低く、大きな規模の大学ほど必修率が高いように思われるが、そのようなことはなく、規模の小さな大学でも「体育」全学必修の大学が多数存在することが認められた。したがって、各大

学によって、「体育」には様々な履修方法があることが明らかになった。この理由は国立大学には教育系の大学や学部が多いという特徴を反映したものであることが考えられる。

(2) 「体育」を担当する教員

表2は本研究において収集した基礎的なデータの中から、国立大学における「体育」を担当する教員に関する内容についてまとめたもので

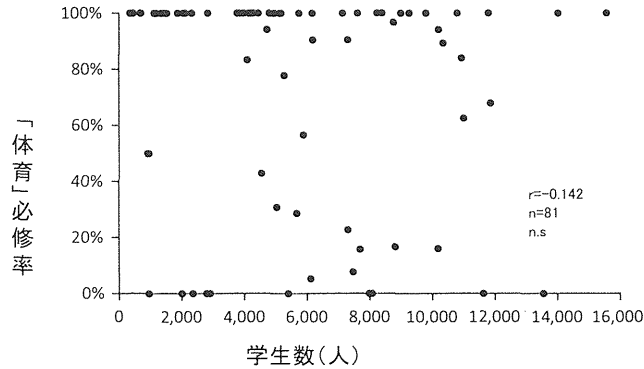


図4 学生数と「体育」必修率の相関関係

表2 各大学の「体育」担当教員の構成

NO	「体育」専任教員					専任教員合計	非常勤講師	担当教員合計	「体育」専任教員の割合(専任率)
	教授	准教授	講師	助教	その他				
1	5	0	0	0	2	7	15	22	31.8%
2	4	2	0	0	0	6	5	11	54.5%
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0%
4	5	4	1	0	2	12	14	26	46.2%
5	3	3	0	0	0	6	0	6	100%
6	4	1	1	0	0	6	7	13	46.2%
7	6	0	2	0	0	8	8	16	50.0%
8	6	2	1	0	0	9	2	11	81.8%
9	5	2	1	0	0	8	10	18	44.4%
10	5	6	0	3	0	14	15	29	48.3%
11	8	1	2	2	0	13	10	23	56.5%
12	1	1	0	0	0	2	9	11	18.2%
13	1	3	0	0	0	4	6	10	40.0%
14	1	0	0	1	0	2	1	3	66.7%
15	3	4	0	0	0	7	7	14	50.0%
16	6	5	1	0	0	12	11	23	52.2%
17	9	5	1	0	0	15	4	19	78.9%
18	0	1	0	0	0	1	3	4	25.0%
19	13	4	0	0	0	17	10	27	63.0%
20	2	1	0	0	0	3	4	7	42.9%
21	3	2	2	0	0	7	15	22	31.8%
22	2	3	0	0	0	5	4	9	55.6%
23	2	2	0	0	0	4	8	12	33.3%
24	3	2	0	0	0	5	20	25	20.0%
25	4	2	2	0	0	8	5	13	61.5%
26	3	5	0	0	0	8	12	20	40.0%
27	5	1	2	0	1	9	5	14	64.3%
28	9	8	1	0	0	18	18	36	50.0%
29	2	1	0	0	0	3	12	15	20.0%
30	5	3	4	0	0	12	10	22	54.5%
31	0	0	0	0	0	0	2	2	0%
32	2	0	1	0	0	3	3	6	50.0%
33	10	2	0	1	0	13	16	29	44.8%
34	4	4	0	0	0	8	8	16	50.0%
35	4	3	2	0	0	9	1	10	90.0%
36	8	3	2	3	0	16	8	24	66.7%
37	8	5	0	0	0	13	19	32	40.6%
38	1	2	0	1	0	4	1	5	80.0%
39	14	18	2	9	4	47	13	60	78.3%
40	1	2	0	0	0	3	19	22	13.6%
41	2	0	0	0	1	3	8	11	27.3%
42	1	1	0	0	0	2	5	7	28.6%
43	1	2	0	0	0	3	5	8	37.5%
44	8	3	1	0	3	15	8	23	65.2%
45	1	0	0	0	0	1	7	8	12.5%
46	2	2	0	2	0	6	16	22	27.3%
47	4	6	0	8	8	26	17	43	60.5%
48	1	4	0	0	0	5	2	7	71.4%
49	6	5	0	0	0	11	6	17	64.7%
50	5	3	0	0	0	8	0	8	100%
51	2	3	0	1	0	6	4	10	60.0%
52	8	4	0	1	0	13	3	16	81.3%
53	1	1	0	0	0	2	1	3	66.7%
54	1	0	0	0	0	1	0	1	100%
55	7	3	0	0	0	10	12	22	45.5%
56	2	4	0	0	0	6	5	11	54.5%
57	10	3	0	0	0	13	17	30	43.3%
58	3	3	0	0	0	6	3	9	66.7%
59	3	1	0	0	0	4	3	7	57.1%
60	6	3	0	0	0	9	0	9	100%
61	7	6	1	0	0	14	13	27	51.9%
62	0	0	0	0	0	0	1	1	0%
63	3	2	1	0	0	6	10	16	37.5%
64	1	2	0	2	0	5	0	5	100%
65	5	2	0	0	0	7	9	16	43.8%
66	8	4	0	3	0	15	13	28	53.6%
67	4	2	0	0	0	6	6	12	50.0%
68	3	3	1	0	0	7	5	12	58.3%
69	7	2	0	0	1	10	7	17	58.8%
70	6	4	2	0	3	15	8	23	65.2%
71	4	5	0	1	1	11	23	34	32.4%
72	8	1	1	0	0	10	9	19	52.6%
73	4	0	1	0	0	5	1	6	83.3%
74	3	3	0	0	0	6	6	12	50.0%
75	0	2	0	0	0	2	2	4	50.0%
76	6	1	3	0	0	10	12	22	45.5%
77	7	3	0	0	0	10	12	22	45.5%
78	5	3	0	0	0	8	8	16	50.0%
79	7	2	0	0	0	9	10	19	47.4%
80	6	2	3	2	0	13	10	23	56.5%
81	5	4	1	0	0	10	5	15	66.7%
計	350	217	43	40	26	676	632	1,308	

ある。

体育の専門教育課程を有する大学においては、そこに所属する教員が教養教育課程の「体育」を担当している場合が多数あることが認められた。また、多くの教育系を有する大学では、教養教育課程と専門教育課程が存在するが、体育教員の所属には区別がなされていないことも多数あることが認められた。したがって、本研究で使用する「専任教員」とは、教養教育課程のみに所属する教員だけではなく、「体育」を担当している専門教育課程に所属する教員も含まれている。

1) 「体育」担当の教員の構成

図5は、「体育」担当の教員数とその割合を、教員の職階別にまとめたものである。「体育」を担当する総専任教員は676人となり、その職階に関する内訳は、教授350人(51.8%)、准教授217人(32.1%)、講師43人(6.4%)、助教40人(5.9%)、特任教員などを含めた他の教員26人(3.8%)であった。

また、専任教員676人と非常勤講師632人(延数)を合わせた担当教員の総延数は、1,308人となることが認められた。また、専任教員の割合は51.7%、非常勤講師の割合は48.3%となり、ほぼ半数になることが認められた。非常勤講師

を含めた総数に対する専任教員の割合を職階別にまとめると、教授26.8%、准教授16.6%、講師3.3%、助教3.1%、特任教員などを含めたその他の教員2.0%であった。

したがって、「体育」を受け持つ教員の約半数が専任教員であり、残りの半数は非常勤講師が担当していることが明らかになった。また、専任教員の中では、教授の割合が過半数を占めているが、30歳前後の若い教員で構成されている講師および助教の割合は12.3%となり、676人の中の83人しか存在していないということも明らかになった。

2) 各大学における「体育」の専任教員数

「体育」の専任教員数は各大学により様々な人数になっていることが認められた。図6は「体育」の専任教員の人数ごとに大学数をまとめたものである。6人の専任教員数という大学が最も多く、10校認められた。また、2人から10人の専任教員数という大学がそれぞれ5校前後認められた。この結果は森田(2014)の推測と異なっているが、国立大学には教育系の大学や教育学部を有する大学が多く、そこでは専門教育課程の体育教員が教養教育課程の「体育」を担当していることから専任教員数が増加したことが考えられる。

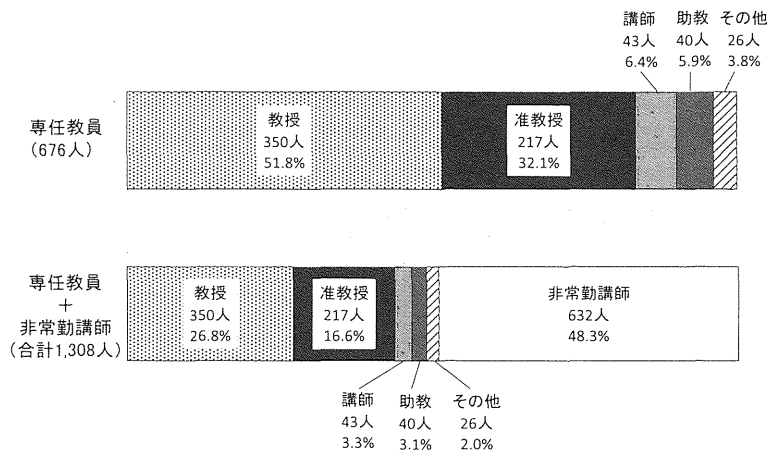


図5 「体育」担当教員の職階

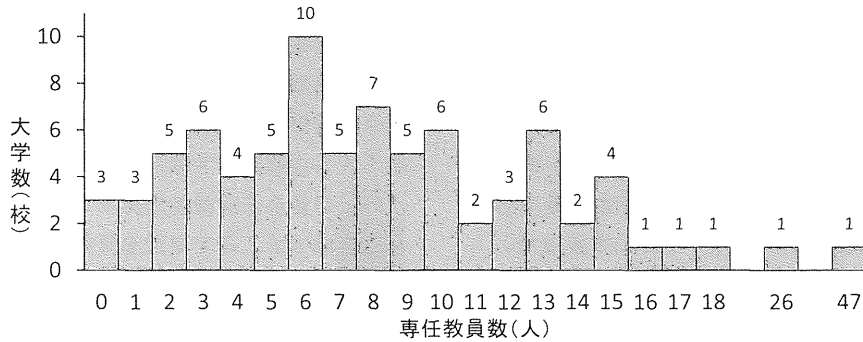


図6 各「体育」専任教員数あたりの大学数

(3) 教養教育課程における「体育」のあり方と
大学体育スポーツ高度化共同専攻を開設する
意義

本研究で明らかになった教養体育の必修化の実態と教養体育を担当する専任教員の実態を手がかりにして、これからの大学における教養体育のあり方とともに、大学体育スポーツ高度化共同専攻を開設する意義や意味について論考したい。

大学大綱化後の教養教育における体育授業の減少、衰退といった流れが加速している現状の中で、国立大学においては、教養体育を必修（卒業要件）とした学科は全体の約半数近く存在していた。大学単位で見ると約6割というデータになる。体育4単位必修の法的根拠が無くなってから四半世紀が過ぎようとしているにもかかわらず、依然として「体育」が必修として取り入れられているという実態が明らかになった。しかし、国立大学81校には、教育系の大学11校や教育学部を有している総合大学が多く、その他の学部でも「体育」を教職の必修科目とした履修方法を課している学科が多数存在している。このことが、教養教育における「体育」の全学必修に関する割合が現在でも高い理由であると推察できる。しかし、今後は少子化現象が加速し、大学への入学者数も減少していくために、教育系大学は減少の一途をたどることが予想され、「体育」の必修率は低下傾向を示していくことも推察できる。

次に、必修単位数についてみると（図3）、1単位、または2単位を必修としている学科が非常に多く、3単位以上を必修としている学科は12.7%しか存在しないという実態も明らかになった。さらに履修方法については、前期および後期に各1単位を取得するケースが多く、1年次に2回履修させて2単位取得させる方式を採用しているところも多数認められた。また、前期のみの履修とした上で、1年次と2年次の2年間に渡って合計で2単位取得させる方式を採用しているところも認められた。さらに、授業の内容については、講義1単位と実技1単位、あるいは講義だけでよいという学科も存在していた。これを大学4年間の全体の中に位置づけると、実質的に短期間の履修で体育授業の成果を得るには短すぎることになり、学生の身体活動やスポーツ活動が生活習慣化されるまでに至らないことが考えられる。このような現状を改善するために、他の教養教育科目とのバランスや施設環境などの要因もあるが、自らが所属する大学や学科の教育方針の中にあって、大学教育カリキュラムの中に「なぜ体育の授業が必要であるのか」についての開設趣旨や意味を、他分野の教員や学生に対して明確に示すことができる資質を有する体育教員が多数出現することが重要になると考えられる。

一方、今回の研究結果の中にあつた“ある大学”の事例の中には、電話での問い合わせに対して、「本大学では、「体育」は必修ではなく、

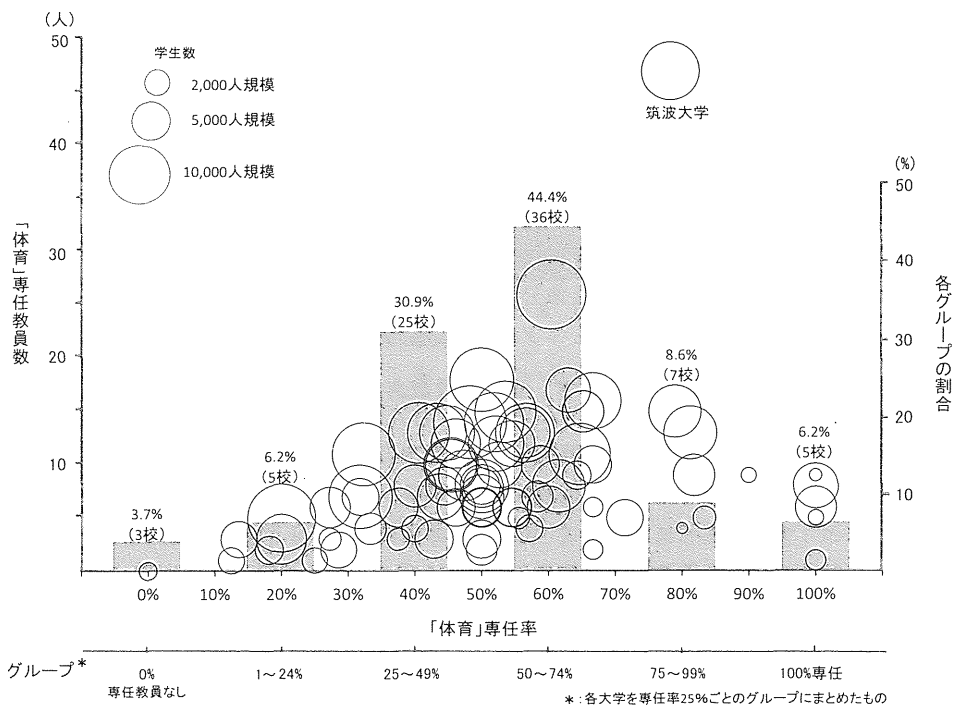


図7 学生数と「体育」専任教員数、「体育」専任率の関係

選択科目であるにも関わらず、学生にたいへん人気があり、学生が多数受講しています（教務担当職員）」という回答もあった。本研究を通して、全体の約半数の学科において「体育」が選択科目となっているにもかかわらず、卒業要件とは関係なく自主的に「体育」の授業を受講している学生が多数存在する大学があることも認められた。したがって、高度な知識や知恵を得る時期でもある大学生に対して、「体育」を必修にしなくても、存在意義を示し必要不可欠で魅力的な教養教育課程の「体育授業」の実践ができる教員が、多数出現することも重要になると考えられる。

図7は、大学を単位として、学生数と「体育」を担当する専任教員数、専任教員率の関係についてまとめたものである。丸の大きさはその大学の学生数を表し、大学の規模を示している。また、棒グラフは専任率をある一定範囲の割合のグループにまとめ、専任率ごとの大学数とその割合を示したものである。その結果、「体

育」を受け持つ教員の専任率が50%～74%の大学数が最も多く36校44.4%、ついで専任率25%～49%の大学数が多く25校30.9%であることが認められた。また、筑波大学は大規模校の中でも、「体育」を受け持つ専任教員率が75%～99%と極めて高く、さらに実際の教員数も極めて多いことから、教養教育課程の「体育」を重視している特徴的な大学であることが理解できる。このために、筑波大学では、教養体育に関する研究も盛んに行われており（阿部ほか、1995；松田、1996；阿部ほか、1999；森田、2000；宮丸、2001；松田ほか、2010；高木、2010；宮下、2012；鍋倉ほか、2012；森田、2014；高木ほか、2014）、また教養課程の「体育」を担当する専任教員も多数存在することから、上記に示した2つの課題を達成することのできる若い人材を教育するために、筑波大学に大学体育スポーツ高度化共同専攻を開設することは意味があると言えるであろう。

また、「体育」の担当教員として、30歳前後

の若い教員で構成されている講師および助教の割合が極めて少ないことが認められることから(図5)、同共同専攻によって学位を取得し、高等教育課程における体育の存在意義や価値を創造し、大学の体育授業に関する実践力と大学体育の発展に寄与する実践的研究力を身に付けた若い「体育」の教員を輩出することが急務であることも考えられる。

4. おわりに

本研究では、日本国内の国立大学に注目し、教養教育課程にある体育授業の履修方法および卒業要件とその担当教員の配置に関する実態を明らかにすることができた。得られた知見は、平成28年度から開設が予定される大学体育スポーツ高度化共同専攻の発展のために役立つ内容を包含したものである。この新しい専攻の設置を期にして、日本国内に高等教育における「体育」の存在意義や価値が創造され、高度な「体育授業」に関する実践力と大学体育・大学スポーツの発展に寄与する実践的研究力を有した若い大学体育教員が、多数生まれることを期待したい。今後は日本国内の私立大学に注目して、同様の研究を行い、国立および私立大学全体の実態を把握する必要があると考えている。

文献

阿部一佳, 坂田勇夫, 高橋伍郎, 福原祐三, 宮丸凱史, 後藤邦夫, 高森秀蔵, 田崎健太郎, 宮下 憲, 本間 崇, 橘 直隆, 安藤真太郎, 大高敏弘, 大森 肇, 白木 仁, 鍋倉賢治, 山田幸雄, 嵯峨 寿, 河合季信, 齊藤武利, 図子美和, 千足耕一, 安田貴彦, 布目靖則, 正課体育に及ぼす大網化の影響に関する調査研究(第1報), 大学体育研究, 17: 57-

84, 1995.

阿部一佳, 高橋伍郎, 嵯峨 寿, 大学らしい体育を求めて生涯学習社会における大学体育の水準を考える, 大学体育研究, 21: 39-59, 1999.

松田裕雄, 金谷麻理子, 吉岡利貢, 小田 梓, 吹田真士, 川村 卓, 小山宏之, 白木 仁, 橘 直隆, 筑波大学体育センターの教育事業におけるカリキュラム概念基本構造の変遷, 大学体育研究, 32: 7-18, 2010.

松田義幸, 生涯スポーツ振興に向けた大学体育の課題, 大学体育研究, 18: 1-6, 1996.

宮丸凱史, 筑波大学における共通体育のカリキュラム編成の経緯と今後の問題, 大学体育研究, 23: 49-61, 2001.

宮下 憲, 我が授業と本学の共通体育への思い, 大学体育研究, 34: 9-15, 2012.

森田 啓, 大学体育の意義・役割に関する一考察, 大学体育研究, 22: 1-8, 2000.

森田 啓, 大学体育が目指すべきこと: 高校体育, スポーツクラブ体育, 専門体育との関係から, 大学体育研究, 36: 39-50, 2014.

鍋倉賢治, 遠藤卓郎, 大高敏弘, 進藤正雄, 嵯峨 寿, 松元 剛, 谷川 聡, 福田 崇, 吉岡利貢, 武田丈太郎, 村瀬陽介, 山田永子, 宮下 憲, 我が国の「大学体育」の基本理念とカリキュラム, 大学体育研究, 34: 59-63, 2012.

高木英樹, 知の競争時代における大学体育モデルの再構築に関する実践的研究の概要 SPERT (Sports & Physical Education Renovation in Tsukuba) プロジェクト, 大学体育研究, 32: 59-61, 2010.

高木英樹, 村瀬陽介, 筑波大学における大学体育モデルの再構築に関する実践的研究, 大学体育研究, 36: 51-62, 2014.